第３回インフォメーション・ヘルスアワード『アイデア部門』　応募用紙

○アイデア名　ニュースの答え合わせ 365

○応募者氏名
または　グループ名　古井　菜月

○解決したい情報環境をめぐる課題

現代の情報環境では、ニュースや SNS の第一報に一喜一憂する傾向が強い。
「〇〇が大問題」「□□で社会が激変」という見出しに反応し、瞬間的に怒りや不安、期待を抱いてしまう。
しかし 1 年も経てば、その多くは訂正や修正が入り、当初の印象とは異なる「実際の結末」が明らかになることが多い。問題は、多くの人がその“後日談”を見届けず、第一印象だけを信じたまま記憶や社会の空気に残ってしまうことだ。結果として誤解や偏見が固定化し、健全な議論や判断を阻害している。

○アイデアの具体的な内容（どんなもので、どんな人が、どう使うと、課題が解決できるのか）

本アイデア「ニュースの答え合わせ 365」は、ニュースや SNS に触れる際の「第一報への過剰反応」と「続報を追わずに誤解が固定化する」問題を解決する仕組みである。具体的には、ユーザーが気になったニュースや SNS 投稿をアプリ上で保存し、当時の自分の感想や予測を簡単に記録できるようにする。その後、その記録は 365 日間保管され、アプリが関連する続報や検証記事を自動で収集・整理する。1 年後に保存した記事と自分のメモが呼び出され、「当時の反応」と「実際に明らかになった事実」を並べて提示することで“答え合わせ”が行える仕組みだ。

例えば「新技術で社会が激変！」という見出しを保存し、当時「きっと普及する」と書いたユーザーは、1 年後に「実際は普及せず話題が消えた」という続報と並べて確認できる。また、「政治家のスキャンダル！」に憤った場合、1 年後に「無罪判決が出ていた」と知ることで、当時の感情と事実とのギャップに気づくことができる。さらに「景気回復へ！」という政策報道を保存した人は、1 年後に統計データとともに「実際は逆に悪化していた」という現実に直面する。このように、瞬間的な印象と長期的な事実を比較する体験を繰り返すことで、短期的な感情に流されず、情報との距離を冷静に取る習慣が身につく。

また、この仕組みは個人の利用にとどまらず、社会的な広がりも期待できる。教育現場では「未来予測ノート」として授業に導入し、生徒が自らの予測と現実を照らし合わせることで、情報リテラシーを体験的に学べる。家庭や地域コミュニティでは「1 年前のニュース答え合わせ大会」を実施すれば、市民同士で振り返りを共有し、健全な情報環境づくりにつなげられる。さらに技術的には、AI が「1 年後の関連ニュースまとめ」や「公式統計」を自動で提示することで、より正確で網羅的な答え合わせを支援できる。

「ニュースの答え合わせ 365」は、瞬間に反応するだけの情報消費を、時間をかけて振り返る“長期的な情報の健康習慣”へと変えていく。ニュースの真実は一瞬ではなく、時間の中で立ち現れる。この体験を仕組み化することこそが、情報社会における新しい健康法だと考えている。

○アイデアは未発表のものかどうか。すでに「試作」「試行」している場合は、新たに付け加えたいアイデア（ブラッシュアップするポイント）など

本アイデア「ニュースの答え合わせ 365」は未発表のものであり、これまでに試作や試行は行っていない。既存のニュースアプリや日記アプリと組み合わせれば比較的容易に実装できると考えているが、本アワードを通じてさらに発展させたい。

ブラッシュアップのポイントとしては以下が挙げられる。

- **AI による自動整理**：保存したニュースに関連する続報や統計データを AI が収集し、1 年後にまとめて提示する。
- **教育現場での活用**：学校の授業に「未来予測ノート」として導入し、生徒自身が立てた予測と現実の違いを比較できる教材にする。
- **コミュニティでの展開**：自治体や地域活動で「1 年前のニュース答え合わせイベント」を実施し、市民の情報リテラシー向上につなげる。

このように、個人の情報習慣改善だけでなく、教育・地域社会全体で活用できる仕組みへと発展可能である。

○アイデアを思いついたきっかけ

私はこれまで、ニュースを見て大きく心を揺さぶられた経験が何度もある。政治家のスキャンダルに憤り、新技術に期待し、政策に希望を感じた。けれど 1 年ほど経つと、当初の印象とは異なる現実が明らかになることが多かった。無罪判決で潔白が示されたり、期待された技術が普及せずに消えていたり、政策が統計的には逆効果をもたらしていたりする。

この体験を通して気づいたのは、**人々は第一報や派手な見出しに反応するが、その後に明らかになる真実には触れずに忘れてしまう** ということだ。誤った印象だけが社会に残り、偏見や不信感が固定化してしまう。これこそが「**インフォメーション・ヘルス**」を損なう大きな要因ではないかと感じた。「もし 1 年後に自分の反応と事実を答え合わせできる仕組みがあれば、感情に流されず、冷静にニュースと向き合えるのではないか」――この課題感が、「ニュースの答え合わせ 365」というアイデアを発想するきっかけとなった。